

---

# Fantastic War

池波創路

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fantastic War

### 【NZコード】

N7883Y

### 【作者名】

池波創路

### 【あらすじ】

『Fantastic War』

トリブルディー

DD社が開発した次世代型ゲーム。

全世界で絶大的な人気を誇り、社会現象を起こしている。

現実世界の“人間”がゲーム内の“人間”を操作する。操作するプレイヤー、操作されるキャラクターの駆け引きがゲームの流れを左右する。

冴えない人生を送る向田宗佑は、このゲームと出会い、新たな人生を歩むことになるのであつた。

あらすじは仮です。今後、内容によって追記します。

## プロローグ

今日もまた仕事がなかつた…。

「くそつ。」

咥えた煙草を足元に捨て、足で踏み消す。

スマートフォンを片手に不精髭を生やした男は駅へ向かい歩いていく。

むかいだそうすけ  
向田宗佑 28歳、無職。

世間ではアラサーなんて言葉が定着しているが、俺から言わせれば耳障りな言葉だ。

元々は会社勤めのサラリーマンだったが、数ヶ月前にリストラされた。

なかなか次の職は見つからず、日雇いのアルバイトをして、なんとかその日暮らしをしている状態だ。

人生終わってるよな。

このまま残りのつまらない人生を平凡に過げし、死んでいく。

そう思っていた。

あのゲームと出合つまでは…。

「昨日のあれ見た?」

「ああファンウーだろ? 見た見た。」

「一人腕なくなつてたよね。」

「あれってやっぱマジなの?」

「わかんねーやらせて話もあるらしいよ。」

電車の吊り革に捕まり、『Fantastic War』と書かれた電車の中刷り広告に田をやる宗佑。筋肉質な男が銃を持ってポーチングしている広告だ。持つている銃はおそらくM4カービンだ。コルト社が開発したアサルトカービンでアメリカ陸軍でも使用されている。無駄に知識はある。俺はミリタリーな映画が好きだ。

『Fantastic War』とは最近流行つているゲームである。いや、最早流行つているを通り越して、社会現象になりつつある。若者たちの間では「ファンウー」とか「ファンタ」、「非現戦争」なんて呼ばれてる。日本人は呼称を付けたり、略すのが本当に好きだ。

いわゆるFPSというジャンルで、一人称視点のプレイヤーが敵味方に別れて銃で撃ち合い、勝敗を競うゲームだ。俺も昔やつたことがあるが、画面を観てているだけで酔つてしまい、何が面白いのかわからなかつた。まだ、サバゲーの方が面白いと思う。まあサバゲーはやつたことはないのだが…。

FPSなんてジャンルは特定の層の人間にしか好まれないジャンル

なのだが、このゲームが爆発的にヒットしたのには、理由がある…。

ゲームの中で実際に操作するキャラクターがプレイヤーと同じ、現実に存在する”人間”なのだ。

俺の世代からすれば、ゲームといえばテレビゲームが主流だつた。テレビゲームも年々進化を遂げ、インターネットの普及によつてゲームもネットに繋げてプレイするのが当たり前になつた。俺がゲームに興味を持っていたのはこのぐらいの技術のときで、今はさらに進化を遂げている。

詳しい技術は俺もつる覚えなのだが、ゲーム内の操作キャラクターは実際の”人間”であり、現実世界のプレイヤーはゲーム内の操作キャラクターと脳がリンクすることで、自分の分身のように操作することができるようになるらしい。

例えば、モニターの前で自分がジャンプをすれば、ゲーム内の操作キャラクターも同じようにジャンプをする。これは、脳科学の進歩により、”人間”的に”人間”的”の脳に固有の番号を印したチップを埋め込み、別の人間からそのチップへ命令となる信号を直接脳に送ることが可能となつたからである。

この技術はBLC（Brain Link Communication）と呼ばれている。

数年前から仮想空間（現実には存在する場所だが、プレイヤーには非公開）で、別の”人間”を自分の分身として生活させ、仮想空間内でコミュニケーションをとることができる『DreamExpo』がヒットしたことで近年爆発的に普及した。<sup>ソーシャル・ネットワーキング・サービス</sup>『DreamExpo』は10年以上前に流行した、SNSの中でつくる自分の分身、アバ

ターのようなものだ。実際の”人間”を購入し、自分の好みの服を着せ、仮想空間で自分の分身のように操作するのだ。

あるものは、人気モデルを操作し、仮想空間の雑誌の表紙を飾る。

あるものは、金持ちを操作し、毎晩ギャンブルに溺れる。

あるものは、イケメンを操作し、毎晩違う女と一夜を共にする。

またあるものは、現実とは正反対の性別を操作し、違う人生を歩む。実際操作しているプレイヤー側は、モデルとはほど遠いデブスだったり、彼女いない歴=年齢の童貞だったりするのだ。

現実世界でできなかつたことができる夢の世界、今とは別的人生を歩めるといった声がヨーザーから挙がり、『Dreamer<sup>トコブルディー</sup>』は大ヒットとなつた。これにより、同開発会社であるDDD社から新たに登場したのが『Fantastic War』なのである。

また『Fantastic War』は、ネット上で毎回プレイの様子が配信され、プレイしていない人にも観るエンターテイメントとして絶大な人気を誇つてゐる。ゲーム内では、毎回ランキングがつけられており、ランキング上位のゲームキャラクター、それを操作するプレイヤーはスター扱いされている。

こんなゲームが流行つてゐるなんて世も末だな……。

宗佑は電車の入口付近の空いた座席にゆっくりと腰を下ろした。

電車の入り口付近にいる高校生の会話に耳を傾ける宗佑。

「お前は誰応援してんの?」

「俺? んー やつぱK<sup>ケイ</sup>E工かな。」

「かつかけーじゃん。2丁拳銃でさ。」

「あいつか…。確かにかつこいいが、女性ファンが多いあいつは嫌いだ。さつさとゲームオーバーになりやいいのに。宗佑はイケメンにただ嫉妬しているだけだった。」

だが、あいつの使用しているベレッタM92は魅力的だ。プロップアップ式ショートリコイル機構を持ち、スライドの上面を大きく切り取ったデザインは大変美しい…。テレビドラマや映画に多く使用されているのは納得だ。

「俺は断然、<sup>ハル</sup>HARUだな!」

「なんせあの胸! スタイル! 顔も綺麗だし、ヤバくね?」

それは同意だ少年。激しい戦闘の度に、激しく揺れるあの胸! 男なら誰もが応援するだろう。俺は毎回あの子の胸…いやいやあの子の活躍を見るのが楽しみなんだよ。

「でもさ、あのゲームに参加してることとか、やっぱ“ひつち”の世界で色々あったダメ人間ことだろ?」

「まあ、キャラになるぐらいだからねー。金のためでしょ?」

「クリアの報酬は確かに魅力的だよね。」

「プレイヤーなら別にいいけどさ、キャラは死ぬんだもんない。」

「下手なプレイヤーだとキャラもかわいそうだよね。」

「ああならないために、必死で勉強していい大学行こうとしてんだけね。」

「ちげーねー。」

宗佑は自分が笑われてるような気分になつた。ゲーム内で操作されているキャラクターは、社会に適応できなつた”人間”が、最後の希望を求めて、参加しているのがほとんどだ。

中には、自分の強さをひけらかしたい戦闘狂のようなやつもいるらしいが、少数派だ。

ゲームは毎ステージ勝ち抜くたびに報酬が得られる。勝ち抜いた数が増えるほど、金額がえていくシステムだ。ただし、ある一定数まで勝ち抜かなければゲームから解放されることはない。当然、ゲームオーバーになれば操作されているキャラは死ぬことになる。

とても俺にはあんなこと…。

電車のドアが開き、宗佑はホームに降りた。

真っ直ぐに家へ向かうつもりだったが、少し歩きたい気分だった。

家の近くの商店街をぶらぶら歩き、小さな公園で足を止めた。

くしゃくしゃに潰れたソフトパックからふにやふにやの煙草を一本取り出し、口に咥えた。

上着のポケットからライターを探す。

が、見当たらない。

苛立ちながら全身を探つていると、目の前にオイルライターの火をつけ、こちらに近づく男性が。

オイルライターから出る火を咥えた煙草につけ、ふーっと煙を口から吐き出した。

「助かりました。ありがとうございます。」

「いえいえ。」

火をつけてくれた紳士なこの方は、すらりと背が高く、自分よりやや高い。ちなみに俺は175cm。年齢は40代ぐらいだろうか？顔の皺<sup>しわ</sup>が少なく健康的な肌は、30代に見えなくもない。ピシッとスーツを着こなしている姿は俺より清潔感があり、好印象だ。

「私はかなりのベースモーカーでね。最近は煙草も値上がりして”こつち”の世界で喫う人は珍しくなったから、目に留まってね。」

「確かに”じゅぢ”では、肩身が狭いですね。」

ふと紳士に目をやると、煙草を薬指と小指に挟んで喫っていた。変わつた喫い方だな。

沈黙が気まずくなつた宗佑は、紳士に話しかけた。

「この辺りに住んでるんですか？」

「いや、私は外回りでね。ちょっと休憩しようと思つて立ち寄つたんだ。」

紳士と宗佑は、たわいのない会話のキャッチボールを繰り返した。

「君は普段は何をしているんだい？」

喫つていた煙草を携帯灰皿で消し、宗佑に尋ねた。

「お、俺は……。」

宗佑は下を向いて、短くなつた煙草を握りいじり始めた。

「平日の昼間にラフな格好で公園にいる時点でなんとなくわかるよ。」

「

宗佑は恥ずかしくなり、顔が熱くなつた。

「図星かい？」

白い歯を見せて笑つた紳士は、40代に見えた。

「からかわないでください。」

宗佑は初対面でいきなり小馬鹿にされ、少し苛立つた。短くなつた煙草で、新たに咥えた煙草に火をつけだしたのがその証拠だ。

「すまん、すまん。仕事柄色々な人を見てきたからね。なんとなくわかるんだよ。」

紳士はゴソゴソとスーツの上着のポケットから艶のあるレザーの名刺入れを取り出した。中から一枚名刺をつまみ、宗佑の手の前に差し出した。名刺のつまり方が煙草と同じなのが気になつた。

煙草を口に咥え、両手で名刺を受け取り、名刺に手を通す。

「えーっと… DDD社…。ト、トリプルディー社つてあのDr eam ExpressとかFantastic War の？」

驚いた宗佑は咥えていた煙草を地面に落としてしまった。

紳士は宗佑が落とした煙草を屈んで拾い、携帯灰皿で消しながら話し始めた。

「私は DDD 社のスカウト部 部長 真島昂だ。<sup>まじまますぱい</sup>まじまじやなくて、ましまだぞ。」

「はあ。」

少し戸惑つたが、宗佑も簡単な自己紹介をした。

「私は主にファンウーラのキャラの人員を確保するためにスカウト活動をしている。」

「DreamExpはかなり前から動いているから、キャラのマーケットはかなり賑やかなんだけど、ファンウーラはまだまだでね。ユザーからもキャラが少ないって声が多いんだ。」

「DreamExpは人権の問題でかなり揉めたけど、一応求人を公に募集できるんだ。ファンウーラは人権以上に人命がかかってるからね。こうしてスカウトって形を取らざるを得ないんだよ。」

「で、俺をスカウトしようとしてるわけですか？ファンウーラのキャラはゲームオーバーになつたら、死んじやうんですよ！」

「確かに。リスクはでかい。だが、見返りも大きいだろ？DreamExpで”あっち”の世界で雇われても、”こっち”の世界の年収のせいぜい、倍ぐらいしか稼げない。それで、自由は奪われるんだぜ？」

「ファンウーラなら月収とか年収とか気にする必要はないな。そもそも報酬の桁が3つは違う。毎日撃ち合いをするわけじゃないから、普段は好きなことをしていくもいい。」

ゲーム内の衣食住にかかる費用は運営側が持つし、ゲーム内で使用する兵器はプレイヤーが費用を負担する。クリアすれば、ゲームから解放されて、ゲットした金で”こっち”的世界で優雅に暮らせる。

「人生逆転するには十分な待遇だろ？」

「…。」

宗佑は震える手でポケットから煙草を取り出すとじてやめた。

真島は宗佑から名刺を取り上げ、名刺の裏側に連絡先を書いて再び宗佑に渡した。

「すぐには決められないだらうし、気が向いたらひこに連絡してよ。」

宗佑に軽く手を振り、真島は公園を後にしようとするが、途中でピタッと立ち止まり、振り返った。

「言ひ忘れてたんだけど、今ランギングに出てるKEI-HARUをスカウトしたのも俺だから。君はそのスカウトのお眼鏡に叶つたんだぜ。」

ニカツと笑った真島はやはり40代に見えた。

「5000でいいへ、」

ポツチャリした少年は、モニター越しに札束を幾つも広げ出した。

「俺はこのライフルもつけるぞー！」

少年？と首を傾げたくなるような老けた顔の少年は、大きな対戦車用ライフル”シモノフ PTRS 1941”をモニター越しに差し出した。

「純ぐーん。KEIを譲つてよー。」

大人びた少女は、モニター越しでもわかる胸元を強調した服装をしていた。

「…。」

やや日焼けした短髪の少年は黙つて3人のやりとりを見ていた。

純と呼ばれた眼鏡の少年はソファに座り、4人が映るモニターを見ながら口を開いた。

「だーめだめ。あいつは今の俺のお気にだよ？いくら金積まれたって譲らないよ。」

「じゃあこれならどう？？」

大人びた少女はモニター越しに、着ている上着を脱ぎ、ブラを外して、胸を手で隠した。

モニター越しの少年達はモニターにかぶりついてその様子を見ていたが、純はすぐにソファに腰を下ろした。

「だーめだ。どんなことをされてもＫＥＩは手放さないよ。」

「やめるよみんな。恥ずかしくねーのかよ。未来<sup>みらい</sup>は服着ろー！太志<sup>たいし</sup>は金しまえ！源<sup>げん</sup>はそんな骨董品持ち出すな！寄つて集つてキャラくれーなんてさ。」

先ほどから3人のやりとりを黙つて見ていた少年が、3人を怒鳴りつけた。

「晴人<sup>はるひ</sup>だつてこの前ＢＩＬＬＹが壊れちゃつたじやない？」

ブラジャーをつけようと、背中に手を回しながら未来<sup>みらい</sup>が言った。

「ありやー傑作だつたな。」

「ようじによつて、クレイモア地雷が埋め込まれた地帯で転ぶなんてな。」

「あれはな、BILLYと俺とのLINEに微妙な誤差があつたから、一瞬反応が遅れたんだ。あれがなければBILLYは死なずに済んだんだ…。」

「晴人は自分の操作ミスをゲームのせいにするのかい？」

純はニヤニヤしながら晴人の映るモニターに近づいた。

「僕の”パパ”が作ったゲームだぞ？そんなことあるわけないだろ。そういうことは僕に勝つてからいいなよ。」

「くそつ…。」

晴人は何も言い返せなかつた。

「せいぜい、みんな僕に近づけるよう頑張ってよ。じゃあねー。」

純はモニターの接続を切つた。

「つたく、うるさい奴等だ。たいして腕もないくせにや。」

「だが、晴人がリタイアしたのはでかいな。あの大したことないキャラでベスト10目前まで順位を上げていたからな。まーどっちにしても僕とKEIの敵じやないけどさ。」

部屋のカーテンを開けた純は、スマートフォンでどこかに電話をし始めた。

「もしー。まじま？」

「これはこれは純様。今日はどうされましたか？」

「最近のストアさー全然いいキャラいないんだけどさー。仕事してんの？」

「純様には以前私がスカウトしたKEIがあるじゃないですか。ラ

ンキングでも現在3位ですし、純様との相性も良いよつて見えるのですが…。」

「まじま…。僕はね。一番じゃなきゃ嫌なんだよ。」

「はあ。」

「だからさ、有望そうな奴が入つたら僕に教えてよ。すぐ交渉に入るからさ。」

「かしこまりました。」

「わかつてゐるね？ちゃんと仕事しないと”パパ”に言いつけるからね。じゃあよろしく。」

純<sup>じゅん</sup>は一方的に電話を切つた。

「…。」

「あのクソガキがあー…こっちが下手に出てれば偉そう」とばっかいいやがつて！だいたいまじまじやなくて、ましまだ！社長の息子だからつて調子に乗りやがつて。」

真島は煙草を取り出し、火をつけようとしたが、”屋内全室禁煙”の張り紙が目に入り、舌打ちをして煙草を胸ポケットにしました。

晴人<sup>はるひと</sup>は真つ暗な自分の部屋でB.I.L.L.Yと最後にプレイした映像を眺めていた。

「…………。」みんな……。

「真島さん。ちょっと書類でわからないと困があるんだけれど。」

宗佑は書類を左手に真島に歩み寄る。

「あ？ ましまじやなくて、まじまだって言つてんだらつがーボケー！」

「いや、あのつ、俺今、ましませんって……。」

「でーどいがわかんねーんだ？」

真島は何もなかつたかのよつて話を続けた。

「これかーダラダラ書いてあるけど、様は”あっち”でなんかあつても一切文句言つなよーってこと。OK？」

宗佑は契約書と書かれた何枚にもなる紙に目を通していた。

「聞いてるかー？」

公園で真島に出会つてから1週間が経つていた。

この1週間俺がしたことといえば、日雇いのアルバイトを2回しただけだった。

家賃も今月で3ヶ月滞納。カード会社からも督促状が送られてきた。

いよいよ追い詰められてきた俺は結局、名刺を片手にスマートフォンに手をかけていた。死ぬのは嫌だ。でもこのまま、平凡な人生を送るのはもつと嫌だった。

手続きは思いのほかスムーズに進んだ。基本は書類を書いて、印を押すだけだ。

「真島さんさつき誰と電話してたんですか？」

「ああ、クソガ…いやいやお得意様ですよ。」

「まだ14歳の子供だからな。」ある会社の社長の息子でな。ファンキーのプレイヤーだ。

「ココって言えばわかるか？」

「ココってあのＫＥＩを操作してるプレイヤーですよね?ボンボンがプレイしてたんですね。なんか意外だ。」

「ファンキーのプレイヤーはたいていボンボンだろ?キャラは高いし、兵器にその弾薬。金持ちじやなきや、プレイできないと思つぞ?」

「結局、世の中金なんですね…。」

「とりあえず、書類はこんなとこだな。次は身体検査だ。」

宗佑は真島にメディアカルームと書かれた部屋に通された。

そこには、絵に描いたような綺麗な女医が脚を組んで椅子に座っていた。

「はじめまして。新人さん。私はDDD社 メディカル部 高木リサ。よろしくね。」

リサは挨拶もそこそこに宗佑に説明を始めた。

「ファンキーのSHOPに君を並べるためには、色々調べなきゃならないの。健康状態、持病、身体能力、性格とか君の隅々までね。まあ調べることについては、さつきの書類を読んで承諾して貰つてるはずだから、私の指示に従つてもらうわ。」

宗佑の診察は、触診から始まり、身体の穴といふ穴に管を通され、リサの言つように、身体を隅々まで、診られた。

こんな綺麗な女医に、自分でも見たことのないようなどころまで覗かれてしまった…。

かなり恥ずかしかったが、かなり嬉しくもあった。

「次はズボン抜いでパンツも下ろして、そのベッドに股を開いて座つて。」

「いんなどこりまでですか？」

宗佑は恥ずかしがりながらも、顔は一ヤけていた。

「今変なこと考えないでよ。」

リサにせつづけられ、宗佑は激しく取り乱した。

診察の後は、筋力、反射神経、心肺機能などの身体能力の検査から、

ペーパーテストのような性格検査まで行われた。

全てが終わったときには、既に口が落ちていた。

「お疲れ様。これで”メディカルチェック”は終わりよ。」

リサは、両手に持った水のペットボトルの片方を宗佑に渡した。

「ありがとうございます。」

シャワーを浴びて、髪が濡れたままの宗佑は疲れた声でお礼を言った。

「よつやく終わったか。」

明らかに寝起きの顔をした真島は、禁煙パイポ風の無煙タバコを咥えながら、ゆっくり宗佑たちに近づいてきた。

「さて、こいつからが本番だ。お前さんの脳あたまの中にチップを入れるぞ。こいつがないと何も始まらないからな。」

「か、勘弁して下さいよ…今検査終わったばかりなんですよ?」

「これが終われば、今日は終りだ。我慢しろ。」

真島にそう言われた宗佑は、深くため息をついたが、仕方なく指示に従つた。

リサから簡単な説明を受けたが、せいぜい歯の治療に詰め物を入れたことがあるぐらいの宗佑は、あたま脳に異物を入れるのは抵抗があった。

「ちよーつと頭開いて、ちよーつといじくるだけだからね。」

リサは可愛く言つたつもりだつたようだが、全然可愛くない！

麻酔を打たれた宗佑はスースと意識が遠のいていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7883y/>

Fantastic War

2011年11月29日22時45分発行